

日本基督教団 東中国教区ニュース

NEWS

東中国教区
教区ニュース誌委員会
〒770-0088
倉敷市鶴形一五五
倉敷キリスト会館内
TEL 086-421-1780

メッセージ

「受難節によせて」

倉敷水島教会 牧師 小岩 輝



「彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」

(イザヤ書五三章五節)

あ る教会に刺をもつピラカンサ（ギリシア語「火刺、火茨」）の木が植えられておりました。ある年、剪定が遅れた結果、枝は伸びてうっそうと繁り、その枝の刺で教会に来る子どもたちが怪我をしかねない状態になっていました。有志と共に枝を刈り込んだのはよかったですが、問題は落とした枝の始末です。茨のように刺が無数にある枝は簡単に折れず、刺が手を傷つけます。大量の枝の嵩を少しでも小さくしようと靴で踏みつけたところ、堅い刺が靴底を貫通し足裏に小さな痛みが生まれました。この刺は靴の漏水の出来事とともに足裏に記憶されました。

昨年真備町の豪雨災害ボランティアに携わったときに、刺の記憶が甦りました。家屋床下の泥かきを行うために床板を外すと、床下の横木（根太）に床板を固定していた無数の釘が長靴の底に当たり、思わず足裏に痛みのようなものを憶えたのです。靴底に鉄芯を収めた安全靴は言うに及ばず、靴は足を守るために大切なもの。靴底は、あたかも私たちの背きのために刺し貫かれ、私たちの咎のために打ち砕かれた主イエス・キリストの姿であります。日頃私たちは靴底に気を留めないのと同様に、神の子で

目次

メッセージ「受難節によせて」	1
二〇一八年度 第二回 宣教会議開催	2
平和集会報告・教師と信徒の合同研修会報告	4
鳥取県東部地区「三集会」	5
大洪水の跡地から	6
教会紹介 和気教会	7
「こんにちは」のお部屋・ニュース誌委員会より	8

ありながら人間の足もとまで低く降られた主イエスの愛に気付きません。主イエスが引き受けられた懲らしめと傷により、私たちは平和と癒しとを得ているというのに。

災害という不条理に見舞われて尚、心を保ち、復旧活動に取り組む姉妹兄弟がおられます。その方々の心と災害という名の刺との間には、緩衝材のようにその身を挺して守ってくださる主イエスがおられるのではないのでしょうか。主イエスの愛は現状を突破する力を私たちに授けてくださいます。この受難節の期間、主イエスが私たちに代わって受けられた十字架上でのご受難に思いを馳せ、主の復活の希望のうちに、真備町を初めとした日本各地の被災地で生きる人々の平和と癒しを祈り求めたいと思います。



ピラカンサ（ヒラヤマトキワサンザシ）
岡山理大植物生態学研究室 HPより

二〇一八年度

第二回 宣教会議開催

教区総会副議長報告

蕃山町教会 牧師 服部 修



服部 修 副議長

(1) 宣教構想懇談会をうけて

二〇一九年二月一二日、岡山教会を会場にして今年度の第二回宣教会議が開催されました。

第二回宣教会議は、「宣教構想懇談会」の内容に沿って行われました。この「宣教構想懇談会」は、先の教区総会で可決された議案第一〇号の教区の宣教強化実質化を進める上での懇談会でした。特にこの議案一〇号は、大きく言えば教区の機構そのものの見直しも含める事柄でもあるため、常置委員会だけで決めていくことではなく、各地区・各教会の歩みとともに進めよう、という常置委員会の判断によって開催されたものでした。

とは言え、それでも懇談会是一部の方々だけの共有になる可能性もあるため、「宣教構想懇談会」を受けた後の第一回宣教会議でも扱われ、その後の常置委員会で、できるだけ情報の共有化を目指す、という意味で、常置委員会のメンバーが各地区の協議会を訪問し、懇談の時をもちました。

ちなみに「宣教構想懇談会」の話し合いの内容については、各教会に送付いたしましたので、まだ見ておられない方はそこで確認をしていただければと思います。

それぞれの地区への訪問を受け、先ず各地区訪問の報告からなされました。六つの地区からの報告を受けましたが、同じ「宣教構想懇談会」を土台としているにもかかわらず、それぞれの地区で受け止め方が異なる報告を聞くと、改め

て、宣教強化実質化には丁寧な懇談の積み重ねが必要であることを痛感させられました。それこそ、地区間だけではなく、教師間にあっても、対極とも言えるような意見を伺いながら、どのように実現させてゆくべきかを考えさせられました。

(2) サポート体制

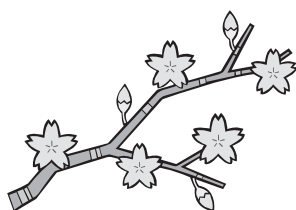
昨年度の宣教会議、および議案第一〇号においても確認されていることは、教区内に既に立てられている教会が、重要な宣教の拠点であり、その教会の宣教をサポートすることが教区の宣教強化の一環である、ということです。そのため、経済的に自立することが困難になってきている教会が教区内には多くあることを考えたときに、「協働」というキーワードをもとに話し合いがなされてきましたし、どのようにサポートができるだろうか、という検討の中で、かつてのプロジェクトでも話し合われたように、一教会一牧師の堅持、というスタンスではなく、柔軟に対応できるサポート体制が必要ではないか、ということが常に話題となってきました。

しかし、各地区を訪問して見えてきたことの一つとして、なお一教会一牧師ということへの希望が少なからず残っているということです。

もちろん、そのような在り方を望むことを否定しているわけではありませんし、それが叶うこととなればそれがその教会にとってふさわしい在り方であることは言うまでもありません。しかし、教区として考えなければならぬことは、もはやそのように願っても明らかに難しいと思われる教会が、なお希望を失わずに、喜びをもってそこで礼拝し続けるために何をするかができるだろうか、という点にあります。それが宣教強化、という言葉が意味していることになります。それゆえに、サポート体制を整えることが、宣教強化のために不可欠のこととなります。一方で、サポートすることが教会の宣教力を高めるよりも、弱くしてしまうのではないか、という意見もあります。この見解にもきちんと耳を傾けなければ、サポートしたはずが最終的にサポートにならなかった、というケースが生じた時に対応できない体制になってしまうでしょう。そうならないための宣教強化とは何なのかを検討していく必要があると思われます。

(3) これからのこと

宣教強化の実質化を進めていく上で、具体的に重要だと考えられるものは、やはり現在ある「教会強化特別資金」についての再検討と、教区内教会の信頼関係の再構築、と言えるでしょう。前者については、草案を提示する中で各地区・各教会の意見を集約しながら、それぞれが納得できる着地点を見つけていく作業が必要になるでしょう。後者については、宣教会議において未受洗者配餐（いわゆるフリー聖餐）のことについて発言された方もあるように、なお丁寧な協議が求められるかもしれません。しかしながら、今私たちに与えられている地域で生き生きと宣教に励む教会を支える、という一番の目的の実現のために、膝突き合わせ、議論を重ねながら、宣教強化の実質化を目指してゆきたいと願っております。どうぞこのことのために、引き続き祈りのうちに覚えていただきますようにと、願うものです。



第二回宣教会議 岡山教会にて

平和集会報告

社会委員会 柴田 彰
(倉吉教会 牧師)

平和集会が倉敷教会で十月二七日に開催されました。おしどりマコ・ケンさんを講師に迎えた講演会です。おしどりは吉本興業の芸人さんですが、幅広く講演活動をなさっています。二〇一一年三月十一日東日本大震災の時は東京で営業活動をなさっていたそうです。その後、福島原発の事故が起こり、周りの空気が



講師の〈おしどりマコ・ケンさん〉

変っていくのを経験されました。テレビで放送されることと、周りの人間が感じそして行動していることとのずれを経験されました。友人たちは大阪に帰っていき、また、大阪に戻ってくるように勧める人も多く、営業が残っているため仕方なく在京が続いたそうです。

テレビを中心にメディアには自粛のフィルターがかかり、本音の部分が報道されない状況に違和感を覚えたそうです。政府は真実を教えないし、テレビさえも報道の自由よりも自粛を優先させていく状況に疑問を感じ、そこから二人の行動は変わっていききました。

真実を知るために、東電と政府の記者会見を逃すことなく追いつけたそうです。真実は分からないにしても、何を誤魔化しているかが想像できるようになっていました。そこから、真実を知るために関連の情報収集、学習、そして、記者会見の追っかけを繰り返されました。真実が知らされていない。都合の悪いことは隠されている。その事実がますます明らかにされていったようです。具体的なことについては、おしどりマコ・ケンさん関連の「You Tube」でご覧になれます。

ドイツの高校に招かれて講演なさった話の中で、原発反対の人でも推進派の人でも、自分の意見が正しいかどうかを学ぶために講演を聴きに來ていた、という話には引き込まれました。成熟している民主主義というものを感じました。

教師と信徒の合同研修会報告

鳥取信和教会 牧師 廣田 崇示



講師の〈浅野淳博（あつひろ）先生〉

十一月二七、二八日、米子錦町教会にて教師と信徒の合同研修会が行われた。講師は浅野淳博先生（関西学院大学神学部教授）、「聖書 聖書協会共同訳をめぐって」と題して二回の講演があった。参加者は三九名であった。

信徒と合同の講演Ⅰでは聖書を新しく翻訳することの意義について話された。訳語が言

葉の変化や聖書学の進展等によって変わっていることが示された。一つの例示を紹介すると新共同訳では「兄弟」と訳されていた語が新しい訳では「きょうだい」に変更されている。それは家父長的な文化の中で女性を含めて「兄弟」という言い方をしているのを現代に適用するために開かれた形である「きょうだい」に変更したとのことである。今回、「規定の病」という訳について問い合わせるためだけに來られた信徒がおられたことを含めて、言葉が生み出すイメージ（先入観）が如何に重要であるかを考えさせられ、聖書を原語の意味を問わずに訳語の先入観だけで読んでいないかと反省させられた。

教師を対象とした講演Ⅱでは「パウロ神学」の進展により訳語が変更されたものが幾つか示された。「ピステイス」という語が「信頼性」を表す語であるので、文脈によって「信仰」だけではなく「真実」と訳されているということが印象的であった。

二日間の研修会を通して聖書の言葉を自分の知識の範囲で読みがちであるがさらに多様な意味があることを教えられ、聖書の奥深さを改めて教えられ感謝している。

鳥取県東部地区「2.11集会」

（八頭教会 牧師）

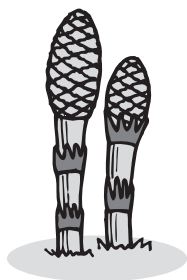
講師 赤川 祥夫

鳥取県東部地区「2.11集会」は、二月九日（土）午後一時より、鳥取教会に於いて開催されました。テーマは「信教の自由を生きる祈禱集会」でした。ヨハネによる福音書とサムエル記上より主の御言葉を聴き、続いて「建国記念の日」制定の経緯と、その推進勢力が「日本会議」となって新しい歴史教科書、国旗国歌法、教育基本法改正、憲法改正などの「国民運動」



鳥取教会での「2.11集会」

を次々に起こしてきた歴史を検証しました。終わりに、①戦前の基軸であった国家神道（国体思想）の究極的な廃絶と支持勢力の衰退を、②天皇代替わり・大嘗祭等での祭政一致の阻止と明確な政教分離のために、③天皇がその宗教祭司としての役割を終え、国民の一人となるように、④日本の国家神道・天皇制・軍国主義が犯した過去の過ちへの真摯な悔い改めを、⑤キリストの王権への信仰と、良心の自由な証しの戦いへの助けのために、という五つの課題によって共に祈りを合わせました。終わりに二月二十四日（日）の「辺野古米軍基地建設のための埋立ての賛否を問う沖縄県民投票」に「日本会議」や安倍政権は「天皇在位三〇年記念式典」をぶつけ、天皇作詞・皇后作曲の歌を沖縄出身の「和製マイケル・ジャクソン」こと三浦大知に「奉祝賛美」させる愚を批判しました。参加者は三〇名ほどでしたが、満たされた集会となり感謝でした。



大洪水の跡地から

倉敷教会 牧師 中井 大介

二〇一八年七月、台風七号の影響によって発生した西日本豪雨で命を落とされた方の魂の平安と遺された方の悲しみに寄り添いつつ祈ります。また被災地では財産の全てを喪失した方が今もなお生活再建のために呻吟している状況に置かれており、失われたものを悼む心を共有していきたいと願っています。

去る七月六日（金）夜には高梁川の決壊にそなえて避難勧告の放送がしきりに流れていました。七日（土）未明から小田川と高梁川が決壊し、倉敷市真備町では最大深度5mを記録する洪水に襲われました。私は七日の夜が明けてから、真備町に暮らす信徒の安否確認を行い、一名を除く生存を確認することができました。ただし連絡のついたうち二名の方は家屋に閉じ込められた状況で、たちまち脱水状態に陥り、外部との通信手段である携帯電話のバッテリーも消耗の一途を辿るため、最小限度の生存確認を終えてからは一通だけ励ましのメールを送り、あとは無事に救出されることだけを祈り続けました。この二名は翌八日（日）未明に救出されていきます。また同じ日に安否不明だった信徒は六日の河川決壊直前に備前市の親族宅へ避難していたことがわかりました。六日夜から八日午前にかけての三六時間は、私



<まびくら>の外観

にとって永いものでした。このとき私たちの愛する方が生きているのかどうかを把握できない状況にあって、どうか無事でいらしてほしいと願いつづけました。雨あがり、ただちに信徒の訪問をすると、茫然として力なく「先生、全部なくなってしまうんです」とつぶやく声。私たちはこの声に寄り添い続けなければならぬと思います。その思いはこの被災支援の原点です。

洪水が引いてからは家屋清掃や改修に向けての補修と解体の準備作業がはじまりました。酷暑の中、十数分おきに水分補給と休息が必要

で終わりの見えづらい働きでした。また、倉敷教会のある倉敷東学区では七月七日から小学校で避難所が開設され、六〇名四〇世帯が約八〇日にわたって寝食をともしにしていることとなります。この小学校避難所では、地域のドクターや看護師、防災士、様々な技能を持つ小学校保護者たちが率先して共同体形成に関わり、秩序のある避難所運営に取り組んでいくこととなりました。私もイム先生のコーヒーを携えて毎日避難所に出かけ運営に関わりました。ここでの交流は今も続いています。

西日本豪雨の真備町における被災局面は、故郷に帰りたいと希望する被災者と災害から再生していく街を希望する行政及び多様な人々によって共同体を再構築する段階に移りつつあります。夜になると暗闇になる街に明かりを灯し、ここに人のぬくもりが存在するようになること、つまり「まびにくらしのぬくもりを」回復することが望まれました。この声に呼応して東中国教区常置委員会は復興拠点「まびくら」を設置していきました。

ここは大洪水の跡地です。「まびくら」という場が、失われたものを悼むと同時に、愛し合うことを望むという良心に基づく愛の共同体が形成されていくための礎になることを期待して止みません。

教会紹介

・和気教会・

牧師 延藤好英



和気教会

創立は、一九二四年。ＪＲ山陽本線と和気駅より徒歩七分、山陽自動車道と和気インターより車で三分のところにあります。車二十台分の駐車場があります。また、教会から徒歩三分のところに

ろに三石教会と共同の納骨堂があります。

礼拝は、毎週日曜日午後三時からで、インターネット中継もしています。第一日曜日の礼拝は「音楽礼拝」で、賛美をたくさん歌う礼拝にしています。お祈り会は毎週水曜日午後二時から。教会学校は毎週土曜日午前九時から。その他に、月に一度、女性の読書会「エステル会」、「がん哲学カフェ」、「絵手紙サークル」、「お琴教室」、「ウクレレ同好会」、「信仰読書会」、「歌の会」を行っています。また、ＪＲ和気駅前で「ゴスペルを歌う会」を行っています。これは沖縄普天間基地野嵩（のだけ）ゲート前のゴスペルに思いを寄せて行っています。三石教会と合同の賛美チーム「セラ」があり、毎週礼拝前に練習をし、礼拝の中やクリスマスコンサートで歌っています。

また、二〇一一年三月の東日本大震災による原発事故から避難する母子を迎えるシェアハウス「やすらぎの泉」が教会の向かいにあり、約一八〇組の母子を受け入れてきました。

わたしは、日曜日だけでなくそれ以外の日も信徒と神さまがつながっているようにと、毎朝「朝メール」を配信しています。また、ブログ『今日も一日ありがとう』では、デボーションガイド『Jesus Calling』のその日の箇所を翻訳して掲載しています。

また、信徒の一人が「自分もメッセージを語れるように」と通信教育ＪＴＪ宣教師学校で学んだので、第五日曜日には礼拝説教を担当してもらい、その時わたしは、他教会の礼拝説教を

担当させていただいています。希望がありましたらご相談ください。第五日曜日以外も可能です。また春と秋に蒜山バイブルキャンプを会場にして黙想キャンプを行っています。一泊二日の超教派の会です。

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」（使徒言行録一章八節）との主の約束を信じ、聖霊を求めつつ歩んでいます。



和気教会 礼拝堂

「こんにちは」のお部屋

「ニュース誌委員会より」

東中国教区ニュース誌委員

渡辺 真一

△ニュース誌委員会について▽

二〇一七～二〇一八年度の東中国教区ニュース誌委員会は、委員長に森言一郎さん（旭東）。委員には、林明奎さん（倉敷）、佐藤孝志さん（琴浦）、嶋村輝子さん（岡山）、渡辺真一（岡山博愛会）の計五名で構成されています。

なお、委員会開催時には、教区総会書記の田中寿明さんがいつも陪席され、助言をくださっています。

現在のニュース誌委員会の主な働きの一つがニュース誌の発行作業です。年四回の頻度で発行するニュース誌では、聖書のメッセージ、教区の情報発信、諸活動の報告、諸教会の紹介などを掲載しています。

また、教区のホームページの管理も当委員会で行なっています。昨今は情報の受発信においてインターネットが非常に重要なツールとなつています。多くの方々に開かれた窓口の一つとして、ホームページを随時更新しています。なおホームページでも発行されたニュース誌を見ることができま

△多くの方々に読んでほしい▽

ニュース誌の役目として諸々の情報をお届けすることはもちろんですが、次のようなことを大切

にして発行に向けての作業を進めています。

①より見やすく、より読みやすいものへ。

②より互いの理解と交わりを深めるものへ。

時に一つの記事に大きく紙面を用い、時に写真イラストを活用する等の工夫をしてきました。

また、できる限り文字サイズを大きくしてきました。より多くの方により分かりやすくお届けできるよう、毎号を振り返りつつ試行錯誤をしています。

△ふりかえって▽

激変する時代状況の中で、宣教も難しい諸課題に直面しています。様々な変化に対応するために、情報を拾い上げて判断していくことも求めら



ニュース誌委員会 編集会議 倉敷教会にて

れていると言えるかもしれません。そういう意味で、教区ニュース誌も大切な役目を担い、大きな責任を背負っていることを思わされます。とはい

（前号の訂正のご報告）

教区ニュース誌一七二号六頁、土井しのぶさんの「教団総会に行つて来ました」の文章で以下の誤りがありました。文中二行目、「二〇一六年総会」を「二〇一四年総会」に訂正。四行目、「二〇一七年から」を「二〇一五年から」に訂正いたします。

編集後記

三月三日（日）の午後三時過ぎ、岡山空港に近い十文字平和教会の礼拝の時間に「うぐいす」が鳴いていたようです。私はみ言葉を語ることに集中して

★ハラスメント相談窓口★

毎月第三水曜日 午前九時～午後九時
電話番号 ○九〇―一三三〇―八七三〇